

令和6年度 奈良市立柳生こども園 研究実践概要

園長名 松下 智加
全園児数 13名

1. 研究主題

豊かな心をもち、いきいきと遊ぶこどもの育成
～異年齢児との関わりの中で～

2. 研究年度

初年度

3. 研究主題設定理由

1歳児から5歳児までの園児が、自然豊かな環境の中、様々な経験や実体験を通して学び成長している。今年度、少人数のため乳児組と幼児組、計2クラスの園となった実態をふまえ、異年齢の中で一人一人が自分らしさを発揮しながら互いに思いやりや憧れの気持ちを持ち、子どもの遊びがより豊かになるような保育内容や環境を考えていきたいと思いこの研究主題に設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- 園の実態と課題をふまえ、研究主題について共通理解を深める。

②研究の重点

- 年齢や一人一人の発達段階を捉え、同年齢や異年齢での活動を適切に組み合わせ、子どもの遊びがより豊かになるような環境を探る。
- 異年齢保育の中で互いに思いやりや憧れの気持ちが育つよう、保育者も人的環境であることを常に意識し応答的で丁寧な関わりを重ねる。

③活動の方法

- 園の実態と課題を全職員が理解し、思いを出し合い共通理解を深める。
- 保育の振り返りを重ね子どもの姿を共有し、子どもの思いや心の動きについて語り合う。

いきいきと遊ぶ子どもの姿…網掛け
子どもの遊びがより豊かになるような環境…下線
子どもの育ち合いを支える援助…波線

【乳児事例】(10月)

保育室の体を動かす遊びのコーナーで、大きな段ボールを広げて滑ったり、折り曲げて中に隠れたりして遊んでいた。すると、A児(2歳児)が折り曲げた段ボールに足をを入れて座り、膝にのせた段ボールをピアノを弾くように細かく指を動かし始めた。その姿を見て保育者が「Aちゃん、ピアノ弾いてるみたいやね」と声をかけると、嬉しそうに体を揺らし



ながら、CDデッキを指さした。日頃から『♪からだがピアノになりました』の曲に合わせて、保育者が「ララララーン」と歌うとピアノを弾く真似をするふれあい遊びをしていた。もしかしたらその曲をかけてほしいのかもしれないと思った保育者は、A児に『♪からだがピアノになりました』かける?』と聞いた。「かけるー!」と嬉しそうに返事をするA児。すでに保育室には違う曲が流れていて、B児(2歳児)やC児(1歳児)が手作り太鼓をたたいて遊んでいた。保育者が「Aちゃんのリクエストで『♪からだがピアノになりました』



かけるね」と曲をかけた。『♪からだがピアノになりました』が鳴り始めると、段ボールのピアノを指で弾いたり、ミルク缶の手作り太鼓をたたいたり、ラップ芯のバチを振ったり、それぞれが曲に合わせて鳴らし始めた。曲が終わると「もう一回!」とA児がすぐ一本指をだしリクエストした。保育者が「もう一回かけるね。じゃあ、次はAちゃんのところで一緒にしようか?」とB児やC児を誘うとA児の近くで一緒に鳴らし始めた。

《考察》

一人一人が曲を聞いて自分なりに音を鳴らしたり体を動かして遊んだりすることを喜んでた。段ボールをピアノに見立てながら遊ぶA児の姿から思いをくみ取り、保育者が表情や言葉で受けとめ返すことによって、A児のしたい遊びが広がったり他の子どもも一緒に遊んだりするきっかけとなった。

『♪からだがピアノになりました』でのふれあい遊びなど日頃から子どもの興味のある遊びを保育者が共に楽しんでたことで、言葉にならないA児の思いに気付くこととなった。また、それぞれ年齢や遊んでいるものは違っても、同じクラスの友達の姿に興味をもち、同じ空間で音を鳴らす嬉しさや楽しさを感じることに繋がったと考える。

【幼児事例】(1月)

園庭の埋まったタイヤに長い板を乗せ、その片側にまたがっているA児(4歳児)。その様子を見て「シーソーみたい」と遊びに入るB児(4歳児)。A児の反対側にB児が座るが、A児の方に板が傾いたままなので、板を上下させようと互いに足を屈伸させ、上にあがるのを喜んでいる。繰り返すうちに上下する勢いが増し、歓声を上げて楽しんでいる。A児とB児の様子を見ていた3歳児と5歳児の数名が「入れて」「やりたい」と遊びに加わる。A児とB児が「こっちのっていいよ」と言い、板の中央に詰めて座る。C児(5歳児)は片方に大勢乗ると板が傾くことが分かっている様子で、「〇〇ちゃんはこっちのって」「〇〇君はこっち」と座る場所を指さし、板に座る人数の調整をする。保育者は、5歳児が遊びを進めていく姿を子ども同士のやり取りのなかで気付いたり試したりして欲しいという思いから、危険が及んだ時にすぐに駆け付けられる場所で見守っていた。全員が乗ると一人一人が足を屈伸するが、タイミングが合わず片方に傾いたままになったり、タイヤから板がずれたりする。また、傾斜で体が傾き、友達と引っ付いたり、引っ付かないようにお尻に力を入れて踏ん張るが、引っ付いてしまったりする度に歓声が起こる。繰り返すうちに上下のタイミングが合ってくるともっと勢いをつけようとして思い切り地面を蹴りはじめ、上下の勢いが増したため怖くなった3歳児は「もうやめる」とシーソーから降り、少し離れた場所から遊びを見ていた。



翌日、3歳児が板を出し、昨日のシーソー遊びのところに板を運んでいた。3歳児のみということで『小さい(低い)シーソーにする?』と聞くと『うん』と嬉しそうに返事をする。高さ10センチほどのプラスチック製の台を見せ、『これはどう?』と聞くと『これにする』とシーソー遊びを始めた。台が低いことでバランスが崩



れにくく、勢いよく上下させても怖くなかったようで、その様子から前日には参加していなかった3歳児も遊びに入ってきた。

《考察》

3歳児は4・5歳児の遊びに興味をもち、やってみたいが同じようには出来ないことで消極的になる姿があった。しかし、保育者が側で見守ることで、4歳児のシーソー遊びに自ら加わる姿につながった。また翌日、保育者が一緒に遊びながらシーソーの高さや上下する勢いなどを3歳児が楽しめるよう再構成し、発達段階に合わせた環境を整えてきたことが自分達で遊びを進める意欲的な姿につながった。

4・5歳児は、いろいろな道具や用具、素材などを使い、自分達が考えた好きな遊びを存分に出来るよう環境を整えてきた。板の動きにより、体が傾いたり板から滑り落ちそうになったりするような保育者が少し危険だと感じる遊びも、お尻に力を入れたりバランスを取ったりしながら遊びを通して体の使い方を習得して欲しいとの思いをもち見守った。そのことで、遊びがより広がり、経験から得た知識を活かしてシーソーの座る人数や場所を調整しながら遊びを進めていく姿につながった。

5. 研究の成果

乳児組は、保育者が信頼できる人的環境となり発達段階に応じた環境構成や援助をすることで、安心感をもち自分のしたい遊びを見つけたり、思ったことやしてほしいことを指さしや言葉で伝えようとしたりする姿が見られる。また信頼できる保育者が一緒に遊び、自然な形で遊びと遊びを繋ぐよう橋渡しをすることが、友達に関わろうとする子どもの心を育むことに繋がった。

幼児組は、3学年1クラスという環境の中で一人一人が自己を発揮しいきいきと遊ぶ為には、人数の多い少ないに関わらず、同年齢だけの活動を取り入れ、その中で自分を発揮できる場や考えたことや試したことを発表する場をつくり、楽しいと感じる経験や成功体験を積めるようにすることが必要であること、また、同年齢、異年齢の遊びや活動を子どもの姿に合わせ組み合わせながら、常に年齢や一人一人の発達を意識して丁寧に関わる必要があることが見えてきた。

6. 今後の課題

異年齢保育を通して、遊びの面白さや疑問を感じたり、試したり繰り返したりすることやする時には、個人の発達だけでなく年齢的な発達の違いが大きくあることを意識的に関わり、子ども一人一人が充実感や満足感を味わっているか子どもと一緒に遊びながら心の動きや変化に常にアンテナを張り職員間で共有し、異年齢保育の中でいきいきと自分らしさを発揮できるよう活動内容や環境を引き続き探っていくことが必要である。